研究経過

講　師　　塚越　和子　先生
（つかごし療育コンサルティング代表）

	期日	テーマ及び内容	俯瞰図番号	人数
1	5月23日（水）	「統合保育の意味」 1. 統合保育とは　2. 障害の考え方　3. 統合保育の心構え 4. 発達障害とは　5. カンファレンスの重要性 ①対象児の発達の特性について ②一学期の支援目標に向けての現状と課題	D1－Ⅰ D2－Ⅱ D3－Ⅰ D4	32
2	6月20日（水）	「行事に参加するための配慮」 事例検討	D2－Ⅱ E6－Ⅰ	36
3	9月12日（水）	「保護者との連携」 事例検討	D3－Ⅱ F1－Ⅰ F2－Ⅰ F2－Ⅱ	34
4	10月17日（水）	「他児との関わりから見た対象児の変化」 事例検討	D1－Ⅱ E4－Ⅱ	34
5	11月14日（水）	「今までの取り組みを振り返る（成果と課題）」 事例検討	D3－Ⅲ E8－Ⅰ	32

◆研究指定園（20園）◆

江川幼稚園　川崎ふたば幼稚園　若宮幼稚園　大師幼稚園
サクラノ幼稚園　宮内幼稚園　諏訪幼稚園　若竹幼稚園
川崎めぐみ幼稚園　津田山幼稚園　宮前幼稚園　有馬白百合幼稚園
初山幼稚園　さざぬま幼稚園　丸山幼稚園　菅幼稚園
東菅幼稚園　柿の実幼稚園　川崎青葉幼稚園　ちよがおか幼稚園

◆オブザーバー◆

川崎さくら幼稚園

第１回　統合保育研究会
月　日　平成 24 年５月 23 日（水）
場　所　生涯学習プラザ大会議室
講　師　塚越　和子先生
（つかごし療育コンサルティング代表）
テーマ：統合保育・特別支援教育
障がいについての考え方
グループバズセッション
「対象児の持つ障がいの特性」
俯瞰図番号　D1 －Ⅰ　D2 －Ⅰ　D3 －Ⅰ
D4

1．統合保育と特別支援教育
・統合保育
発達に遅れや偏りのある子どもと、定型発達をしている子どもが共に育つことを目的とした保育
・文部科学省の報告（2003 年）
通常級に在籍する発達障害が疑われる児童・生徒は全体の 6.3%（現在、学級の１割は支援の必要な子どもがいる。）
・学校教育法の改正→特別支援教育の導入
通常級に在籍している学習上、生活上の困難を持つ子どもを支援する教育を行うことが定められる。

2．幼稚園で求められること
発達障害を含めた障がいをもつ子どもの対応について、文部科学省からの要望
◎教職員の理解促進をはかる
◎支援体制の整備―園長・副園長・主任が相談にのり対応する
◎特別支援教育コーディネーターの配置
⬇
要支援児の発見と早期の支援

3．子どもが集団活動をする場
・発達障害を持つ子どもの特異性が目立ちやすい（特徴がはっきりあらわれる）
・保育者が早期発見しやすい環境である
⬇
早期支援につなげられるが、保育者１人で抱え込まないこと。
園全体で対象児を受け入れ、協力して支援していく。

4．気になる子どもを支援するには
①子どもの<u>発達特性</u>を学ぶ。
↓
発達特性とは、大きな特徴が顕著に見られる。又、明らかに、その年齢では見られない行動
②発達特性を考慮に入れて対応策を考えていくことが有効である。
③文部科学省から言われている早期支援（=望ましい行動を身につける環境や機会がある）をすることで、大きな問題となる行動が軽減する。

5．発達の特性とは何か
●主な特性
・保育者が話していることはわからないようだが、製作は好き、紙芝居、絵本は見る。写真が好きなど、視覚優位の可能性が高い。
・記憶力がずば抜けてよい。
・耳をふさぐ、粘土やのりを触わろうとしない＝感覚の過敏さがある。
・走り回るのに動きがぎこちない。ぶきっちょである。静かに座り続けられない。
・こだわりが強い。

6．発達障害の考え方
・発達特性は生来的なものである。
（生育歴を聞いていくとわかりやすい）
・保護者のしつけ・対象児の家庭環境が原因ではない。ただ苦手さを持っているので育てずらさがある。
・生活習慣や遊びなども、うまくできるようになるには時間がかかる。
→繰り返し行うこと。

・身につけて欲しいことをスモールステップに分けて（小さな目標に分けて）繰り返し教えていくことは有効である。

7. 支援が必要な子どもがクラスに居ること
・対象児は支援されるだけの対象ではなく、他児の“育ち”にも変化がある。
・保育者も対象児や他児を通して、色々な経験をして、共に支え合い、育ち合う関係になれたと感じることができる。

◎グループバズ
テーマ「対象児の発達特性を話し合う」

● A グループ
・こだわりが強く、コミュニケーションが苦手である。
・整理整頓ができない。座っていられないため落ち着けるものを見つけたい。

● B グループ
・こだわりが強く物を投げることがあり、活動に添うことが難しい。
・気持ちの切り替えがうまくいかず感情的である。
・写真・絵カードなど視覚の方がわかりやすい。

● C グループ
・難聴―友だちとどう関わったらよいかわからないため、表情で読みとる。
・ロッカーのマークを見る。1 人でふらふらするなど同じ行動が多い。
・言葉での理論がむずかしいため、わかりやすく短い言葉で伝える。

● D グループ
・言葉はオウム返し、コミュニケーションが取りづらい。
・大きいものを一口で食べる。そしゃくが弱い。
・製作・数字・折り紙がずば抜けて得意。

● E グループ
・言葉の理解の弱さから集団生活になじめない。コミュニケーションがとれない。
・集団での声掛けでは行動できない。
・こだわりがあり、思い通りにいかないとパニックになる。

● F グループ
・集中力がなく、体の一部が絶えず動いている。
・こだわりが強いため次の活動への切り替えは、絵カードを使う。
・診断名が出ていないため保護者との連携が難しい。

◎塚越先生より講義

●食事の時に大きい物を口に入れる
└→口の中の大きさを自覚できていないかもしれない。
そのために、ST（言語聴覚士）に指導してもらうとよい。
(ST は、言語・理解・表出・吃音・滑舌・そしゃくについての専門職)

●変化に弱い
・いつもと違う行動・環境など、わからないことが不安になる。
└→こうすれば、いつもと同じようになることを知らせる。

●落ちつけるものを見つけたい
①「どういうものが好きか？」「何のキャラクターが好きか？」保護者に聞く。
②園にある物を見せたり経験させて、対象児が興味を持った物を持たせる。
└→安定するようになると、人の話を聞くようになり、座るようになる。
③何か学んで 1 日終わってほしい。
└→目標をもって 1 日・1 学期を過ごすことが大切である。

●嫌な気持ちをわかってほしい
・顔の表情・声のトーン・ジェスチャーなど含めてコミュニケーションをとっていくが、一番苦手なことである。人の気持ちがわかりずらい。

●保護者との連携
・保護者が、受け入れるとは思わないこと。
・認める認めないに関わらず、集団の中での苦手さを伝えていくことが大切である。

第２回　統合保育研究会
月　日　平成 24 年６月 20 日（水）
場　所　川崎市総合福祉センター
（エポックなかはら）
講　師　塚越　和子先生
（つかごし療育コンサルティング代表）
テーマ：行事に参加するための配慮
事例検討：おたずね FAX から学ぶ
グループバズセッション
「行事に参加するための配慮」
俯瞰図番号　D2 －Ⅱ　E6 －Ⅰ

◎事例検討１　おたずね FAX より
―対象児４歳　自閉的傾向―
○クラスでの行動
・自分の思いどおりにならないとカンシャクを起こす。
・物の貸し借りがうまくできず、カンシャクを起こす。
・その結果「もうやだー」と言って物を投げる。
質問⟶カンシャクを起こした時に、どのような声かけをしたらよいのか。
・言葉がけはやめること。
・蹴ったり噛むこともあるので保育者も自分を守ること。
・違う場所に連れていき落ち着くまで待つ。

○物の貸し借りがうまくできず、カンシャクを起こした。⟶貸し借りの体験をする。
①保育者と２人で練習すること。保育者は「貸してくれてありがとう」と言って返すとよい。家でも同じように練習する。
成功体験を積み重ねる。
②大人と対象児、もう１人子どもを入れて練習すること。子どもとの関係の中でできるようにステップアップしていくこと。
└→大人が１つずつ教えていかないと学びが積み上がらない。

◎事例検討２　おたずねFAXより
―対象児３歳　言葉の遅れ―
○クラスでの行動
・欲求を満たしてあげることでクラスに戻る。
・「今は○○をやる時間だから、席に戻ります」と伝えても席に戻れない。
・朝の会、帰りの会などの時に、抱っこを求めるので、それに応じないとクラス内を走りまわることがある。
質問⟶すべての欲求を満たしてあげるべきなのか。
・すべてを満たすことは、すべきではない。
・この場面なら座っていられる・座りやすそうな場面を考える。
・座った時はとなりに大人がいるとよい。
・活動終了後はどうするか、事前に考えておき部屋から出ていかないようにする。

◎グループバズ
テーマ「行事に参加する時の配慮」
● A グループ
・運動会の組体操は、遊びながら友だちと触れ合う練習を取り入れている。
・事前にゆうぎの曲を渡し、家で流してもらう。
・保護者に練習の様子を見てもらい参加の仕方を話し合う。
● B グループ
・運動会を学校の校庭で行うため、事前に見学に行ってもらう。
・全てに参加ではなく対象児のできる範囲で頑張る。
● C グループ
・どのように取り組んでいくか事前に保護者療育センターと連携しておく。
・友だちの力をかりる。
・保護者の要望に合わせた対応をしていく。
● D グループ
・視覚的イメージがわくように写真やビデオを見せる。
・保護者と相談して対象児に合った行事の目標を設定する。
● E グループ
・楽しんで取り組めるように心がけることが大切である。
・さまざまな種目がある中で対象児ができそうな事を選んで参加する。
・当日は、補助の保育者についてもらいトラブルがないように配慮する。
● F グループ
・組体操は全体の流れがとまらないような場所で行う。
・目標を決めて行事に取り組むようにしている。
・環境に慣れるようにお気に入りの物を持っていったり、その空間に落ち着けるように配慮する。

◎塚越先生より講義
●感覚の過敏性と過鈍性について(例も含めて)
└→発達にかたよりや遅れのある子どもたちの多くには感覚の過敏性と過鈍性がある。
・視覚―暗いところ・ピアノの後ろが落ち着く電気をつけるとまぶしくて目がチカチカする。
・味覚―同じものしか食べない（極端な偏食)。濃い味が好き。白ご飯のみなら食べる。
・聴覚―音や声が大きく感じる。よく耳を押さえる。
・臭感―匂いをかぐ。かいでからごはんを食べる。匂いをかぐと安定する。
・触覚―のり、ベタベタが嫌い。砂、芝生の上を歩けない。特定な服の素材が不快。
└→保育者の立ち位置の後ろは、飾装しないで、すっきりとホワイトボードのみにする。誕生表も小さくし、端に貼るとよい。おもちゃ等、視界に入る時は、無地のカーテン・タオル等で覆うとよい。
●感覚の過敏さは状況や感情による
・体調が悪い、不安や緊張した時に出る。

・夢中で遊んでいる時、自分から体験する時は平気な時がある。
・基本的には、過敏さを認めてあげること。その時々に対応する。
㊀シャワーの水…他児のようすを見せる。ためた水を自分でかけるところから始める。

●行事は対象児だけではなく保護者を含めた参加である。
今までどのように対応してきたか３事例発表してもらう。

①年長クラスリレー
・対象児がいることで順位が落ち、まわりの保護者からも言われる。
・対象児の親が障がいがあるということをまわりに言わなかったためサポートするのに大変だった。
・皆で協力すればもっと早く走れる等話し合い当日は順位も上がった。

②全ての行事について、保護者と話し合い目標を決めるようにしている。
・母親も障がいを受け入れているが、もっとできるから周りの子と同じようにしてほしいと要望してくる。
↓
話し合いの場に主任・園長も同席してもらい「園としてはここまでしかできない」ということをその都度伝えた。

③発表会オペレッタ
・対象児のとなりは、しっかりした女児にした。
女児には移動の手伝いをしてくれるというのでお願いし保護者にも伝えた。
・発表会直前、女児の母親より「夢の中でうなされている、対象児の名前を呼ぶ」等の相談を受ける。
↓
次の日からの練習は、自分が楽しむように話す。対象児の手伝いはしないように話し、本人に任せた。
↓
数日後、自分から対象児に教え、当日は楽しく参加した。

●対象児の手伝いをしてくれている他児の保護者には、どのように伝えているか？発表してもらう。
・対象児をお世話する子が出てきた時に、他児の保護者に、
「○○くんをお世話することが多いので、本番に手を引っぱったりすると横を向いたり本人にも支障があるけどいいですか？」と伝える。
↓
お世話することが生まれるのが統合保育である。
行事を通して、ともに育つ。

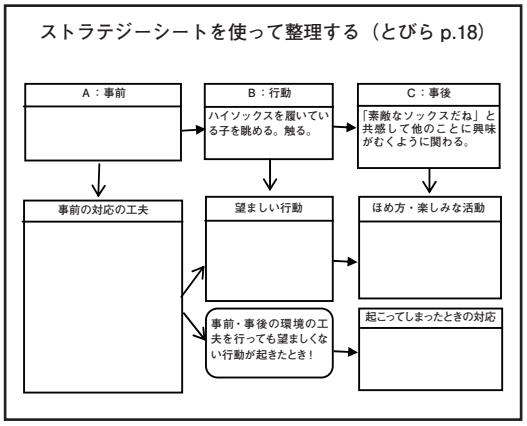
―参考文献―

・発達障害の子の感覚遊び・運動遊び
講談社　2010 年　木村　順監修

第３回　統合保育研究会
月　日　平成 24 年９月 12 日（水）
場　所　川崎市総合福祉センター
（エポックなかはら）
講　師　塚越　和子先生
（つかごし療育コンサルティング代表）
テーマ：保護者と連携をする時の心構え
事例検討：おたずね FAX から学ぶ
ストラテジーシートの使い方
グループバズセッション
「保護者との連携」について
俯瞰図番号　D3 －Ⅱ・F1 －Ⅰ・F2 －ⅠⅡ

◎事例検討１　おたずね FAX より
―対象児５歳　非定型自閉症・精神発達遅滞―
○クラスでの行動
・ハイソックスを履いている女児の足を眺めたり時には触ったりする。又、女児を追いかけたりもする。
○現在の対応
・「素敵なハイソックスだね」と共感して他のことに興味が向くように関わる。
・ハイソックスの写真集を作って見せる方法以外に、何ができるのか。
○質問
・この行動にどのように対応していけばよいか。
○非定型自閉症とは？
・非定型自閉症（特定不能の広汎性発達障害）は、社会性・コミュニケーション・こだわり（想像力）の３つの症状はないが、自閉的要素を持っている場合の診断名である。
（統合保育へのとびら P3 参照）
↓
自閉的要素とは、危険回避が苦手・感覚の鈍感性と敏感性・耳をふさぐ・痛がらない不器用・同じ姿勢を保つのが苦手等は持っている。

○ストラテジーシートを使用して整理する。
（統合保育へのとびら P18）
→ストラテジーとは対策・対応という意味。ストラテジーシートは状況を整理するためのツール。

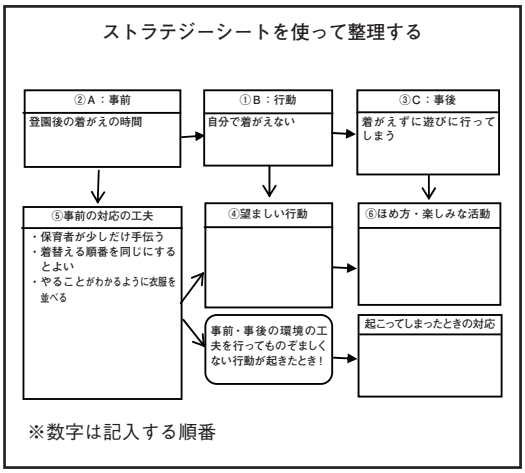


・対象児の行動に関しては、相手の気持ちを繰り返し伝えていく必要がある。
↓
叱ると隠れてやるようになるため、どうやったらやらないか環境を工夫していくことが大切である。
・人に向かうことが軽減されれば、ハイソックスの写真集を使うのも１つの手段である。

◎事例検討２　おたずね FAX より
―対象児４歳　軽度精神発達遅滞―
○幼稚園では：
・着がえの手順表、保育者の声かけで朝の支度をすることも増えた。「先生、やって」と訴える時がある。
○家庭では：
・自分で着がえを行っている。
・保護者に甘えているだけなので自分でやらせてほしいと言われる。
○質問
・家庭と同じ手順で着がえをしているが、保育者が手伝わないと遊びにいってしまう。どこまで甘えさせてよいのか。
↓

・家と園の環境が違うのだから行動が違うのは当然である。
・園の中でできるところ、苦手なことを手伝うことでできるようになっていく。

○軽度発達遅滞とは？
・軽度の意味
知的機能（認知・記憶・思考・学習する力、など）の発達水準が対象児の実際の年齢よりも遅れている状態を指す。
軽度　50 ～ 75
日常生活に差し支えない程度に身辺の事柄を理解できるが、時と場合に応じた臨機応変の対応は不十分。日常会話はできるが、抽象的な思考が苦手で、こみいった話しは難しいので、場合によっては支援が必要。



○通常級で過ごすのはむずかしい。環境から学ぶ力はすごく弱い。支援が必要な子どもである。

◎グループバズ
テーマ「保護者との連携について」
グループバズ…ロールプレイ
A：保育者役　B：保護者役
C ～ F：やりとりを観察する（よい所を沢山拾う）
1. 5分間、A・Bでやりとりする。
2. 終了後、A・Bの人に肯定的なコメントを伝える。
・役を交代して２回ロールプレイを行う。

○ロールプレイの内容
①保護者に園でのようすを伝える。（苦手なところ・気になる行動をどのように伝えるか）
②家で何かできることがあれば伝える。

○ロールプレイを行い、実際どう感じたかグループごとに発表する。

● A グループ
○保育者役―話を進めていく順序がむずかしい。
・遠まわしすぎてもダメだし、保護者に伝わったかなと思う。
○保護者役―できることの事例も話してくれて苦手なことがあるんだとわかった。

● B グループ
○保育者役―家でのようすを聞きながら母親自身気になることがあるか聞いてみた。
・何を一番先に言えば伝わりやすいか、相手も受け入れやすい気持ちになるかと、伝えながら迷った。
○保護者役―園での対応の仕方を話してくれることで安心感を持てた。又、保育者との信頼関係にもつながるかなと思った。
○観察者―保護者に伝える時は、保育者がきちんと伝える内容を整理しておかなければならない。
・よいことから話すと聞き入れやすい。

● C グループ
○保育者役―保護者の気持ちを聞き出しながら共感できる部分は受け止め、伝えた。
○保護者役―4月からの成長、頑張っていることを伝えてもらいその後の話も、聞いてみようと思った。
・自分１人ではなく、一緒にやってくれるんだなと思えた。
○観察者―伝える時期、行事について等、その時々で話し方を考えなければいけない。

● D グループ
○保育者役―今までの成長、現在のようす、今

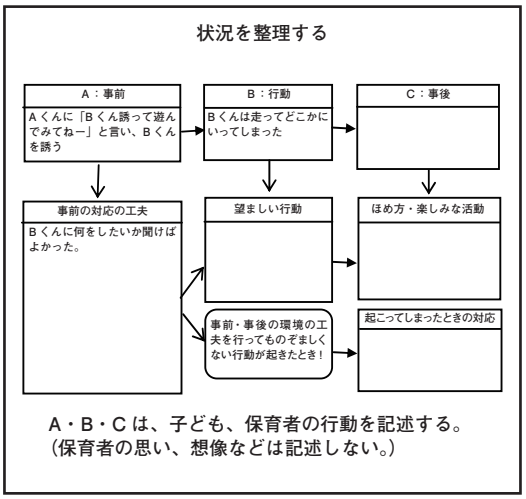
後こうなってほしいと具体的に話す。
・保護者の表情やリアクションが気になる。
・一緒に頑張っていこうと前向きに話す。
○保護者役―よいところは言ってくれたが「なんでうちの子だけできないの？」と不安が感じられた。
・話していくうちに、具体的な取り組みも聞かれ、次の話し合いの時には、もう少し自分から聞いてみようと思った。
●Ｅグループ
○保育者役―よいところから伝えていくが保護者から色々聞いてくれると話しやすいこともある。
・言葉の選び方、伝え方のむずかしさを感じた。
○保護者役―笑顔で話してもらうと安心する。
・前向きなことは聞いてみようと思った。
・気になることは、そう思いたくないので聞かなくてよいかなと思った。ただ話していくうちに課題は聞けた。
●Ｆグループ
○保育者役―普段のようす、よいところとマイナス面も伝える。保護者より「他はどうですか」と聞かれ一緒に考えながら話せた。
○保護者役―「何を言われるんだろう」という緊張感があったが、保育者が笑顔で話してくれ落ちついた。
・他に興味があり、落ちつかないと言われると好奇心旺盛なのかなと思い、他児と比べてみようと思った。
◎塚越先生の講義
●保護者がなぜ子どもの発達特性を受けとめるのがむずかしいのか。
・一見して理解できる障がいではない。
・家庭では目立たない。集団の中で目立つ。
・できる時とできない時がある。
・他児よりも“できる”ことがある。
・勉強についていかれると「通常級」が居場所だと親も学校も考えてしまい、勉強中心の判断になり、課題が先送りされる。
└→社会性の部分
（学齢期・思春期の本人、家族に必要な支援を考える　関水　実資料より）
●なぜ、保護者と連携をとるのか
・発達障害とその周辺の苦手さをもつ子ども達が思春期・青年期になり、初めて自分の障がいを意識した時→受けとめきれずに引きこもり、親を攻撃する場合がある。
⬇
最後まで、本人の立場に立って支えられるのが親で、そのような親を持った子どもは自己肯定感が強い。
（「成人期から見た発達障害の学齢期・思春期と家庭の関わり」より）
・保護者が障がいの特性を知る。叱る、注意するを繰り返していくと必ず２次障害が起こることを理解してほしい。
・保護者が子どもにどう接していくかが、子どもの育ちに大きく影響する。
↓
保育者は、保護者側の立場の応援者になってほしい。
●家庭での対応は、保護者が取り組みやすいことからお願いする。
・家庭での取り組みが一番大切なため、具体的に方法を伝えてもいいし、やり方を保護者に選んでもらってもよい。
・取り組みをしている中で、子どもの特性も出てくる→保護者も、どう対応したらよいか学ぶチャンスである。

―参考文献―
・発達障害支援フォーラム in 横浜
～学齢期・思春期の本人、家族に必要な支援を考える～
・気になる幼児の育て方
―子どもに「寄り添う」ことで、よりよい支援がわかる―
石塚謙二（編著）東洋館出版社 2010 年

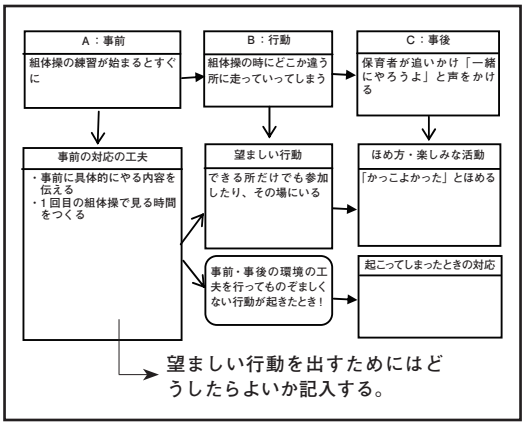
・乳幼児健診で見つけたい軽度発達障害の見方と関わり方
—子どもとの関わり方　医師は？保育者は？—
東京医科大学小児科　宮島　祐
乳幼児健康審査会研修会資料　2007 年

第４回　統合保育研究会
月　日　平成 24 年 10 月 17 日（水）
場　所　川崎市総合福祉センター
（エポックなかはら）
講　師　塚越　和子先生
（つかごし療育コンサルティング代表）
テーマ：おたずね FAX から学ぶ
ストラテジーシートを使う
グループバズセッション
「対児との関わりから見た対象児の変化」
俯瞰図番号　D1 －Ⅱ・E4 －Ⅱ

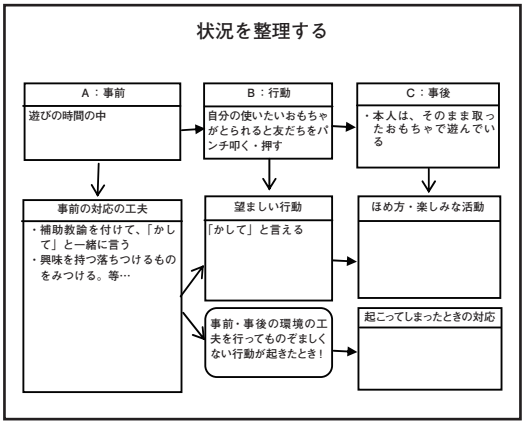
◎事例検討１　おたずね FAX より
—対象児４歳　軽度発達遅滞—
○特徴ある行動
①２学期に入り落ちつきがでてきた。
②他児と本を読む、走る姿が見られるようになった。
③手遊び、紙芝居に興味を示すようになった。
○保育者の思い
友だちとの関わりを増やしていきたいがどうすればいいか。
○ストラテジーシートを使って問題解決していく。



◎事例検討２　おたずねFAXより
―対象児５歳　精神発達遅滞―
○特徴ある行動
①大きな行事に弱く、行事前は不安定になる
○保育者の思い
対象児、ペアになっている子どもにとっても楽しく運動会の練習を行える方法を知りたい。
○精神発達遅滞　DQ（発達指数）63
DQ100　平均的な発達をしている。
DQ70～100　知的な遅れはない。
DQ70～75　知的に遅れがある。
重度・中度・軽度で分かれる
○ストラテジーシートを使って　状況を整理していく。
→模造紙に書いてあるストラテジーシートを使用し付箋に自分の考えを書き、貼っていく。グループごとにストラテジーシートを完成させていく。



◎事例検討３　おたずねFAXより
―対象児４歳　広汎性発達障害―
○特徴ある行動
①コミュニケーション力の弱さを持つ。
②他児に興味はあるが、うまく関われない。
○保育者の思い
パニックになった時に、他児にどのように伝えたらよいのか知りたい。
○ストラテジーシートを使って状況を整理する
・A事前、B行動を記入し、具体的に聞きたいことを質問する。
・情報をもらうことで、イメージしやすくなり対応の仕方がでてくる。
・「望ましい行動」「事前の対応の工夫」はグループごとに話し合いストラテジーシートを完成させていく。



※各グループのストラテジーシートを見て回る。
◎塚越先生の講演
●遊びの発達に照らして対象児を観察する
・感覚あそび　感覚刺激を楽しむ。
・ひとりあそび　１人で楽しむ。（1～2才）
・平行あそび　他児のそばで１人で遊ぶ。
・対面あそび　他児と同じ遊びを楽しむ。
→トラブルが出る（大人が入り学びの機会にかえていく）
・順番あそび　おもちゃを共有し、時には順番で遊ぶ。
→社会性の一歩
・グループあそび　複数の子どもでルールのあるあそびを楽しむ。
・ごっこあそび　互いの役割を決めて演じながら遊ぶ。
⇩
・この中で、対象児はどの段階にいるか考え、少しずつステップアップをふんでいくと遊べるようになる。

●１人でしか遊ばない子

・発達障害を持つ子どもの中には、他児から誘われていても仲間に入ることを嫌がり１人で１つのことにこだわって、それをずっと続けることを好む。

不安や緊張を感じることはなく、
安心できるのではないかと考えられている

●人と関わることが苦手な子

・同年齢の子どもの関わりは、予測が立てられないことが多く、気持ちも不安定になりやすいために、関わりを拒む。

・対象児より年齢の高い子どもとの関わりは上から指示が出たり、真似してついていけばよいので動きやすい。

・ただし、あそびのルールがわからないので不安を感じて、他児の中に入れないケースもある。（あそびの成功体験が少ない）

●人との関わりを少しずつ増やしていく

他児と遊ばない原因が何なのか見きわめることが必要

1. 愛着の持てる保育者と関わる。
   母との愛着関係があると離れられる。
   →そして、保育者が安全基地となる。
2. 他児と一緒に居られる機会をつくる。
3. 楽しい経験を味わうこと（成功体験）
   =「また、やりたい」と思うように、短くてよいから楽しく終わることが大切である。

●他児との接点を探す

・接点＝保育者と対象児の関わり方

保育者が一番のモデル

・保育者が対象児・他児の思いを時には代弁する→「きっと〜って言いたいんだよ」

・生活をともにしていく中で、あたりまえのように対象児を受け入れる関係

・対象児に対しては、遊びのルールを簡単にしてもらう。

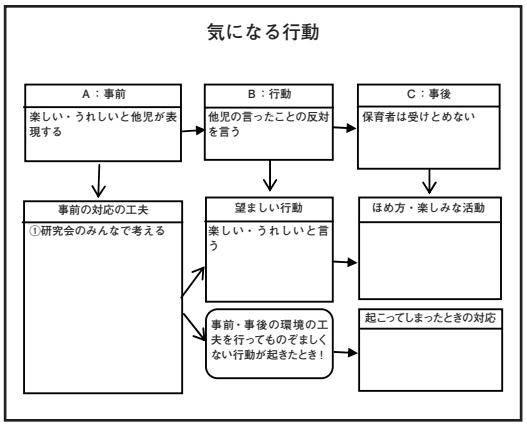
―参考文献―

・発達障害のある子の理解と支援
―ありのままの一人ひとりに向きあうために
母子保健事業団

・発達障害のある子へのサポート実例集
幼稚園・保育園編
上野一彦監修、酒井幸子、中野圭子著
2012年　ナツメ社

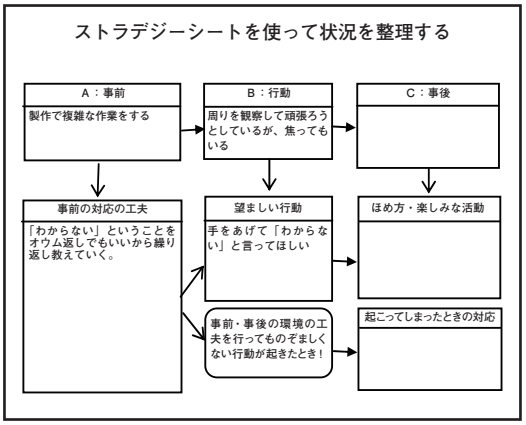
第５回　統合保育研究会
月　日　平成 24 年 11 月 14 日（水）
場　所　川崎市総合福祉センター
（エポックなかはら）
講　師　塚越　和子先生
（つかごし療育コンサルティング代表）
テーマ：今までの取り組みを振り返る
事例検討：おたずね FAX から学ぶ
ストラテジーシートを使う。
グループバズセッション
「対象児と他児がいるクラスづくりについて具体的な取り組み」
俯瞰図番号　D3 －Ⅲ・E8 －Ⅰ

◎事例検討１　おたずね FAX より
―対象児５歳　診断名なし―
○クラス全体で喜びや楽しいと感じている時に反対な言葉を言って場の雰囲気を乱す。対象児の否定的な言葉にはあまり耳を傾けず、よいことを言った時に、皆の前でほめたり認めたりするようにしている。
否定的な言葉は後で受けとめている
↓
ストラテジーシートを使って、皆の意見を取り入れながら整理する。
○対象児の様子
・マイナスの言葉で表現する。
・１人でいることを好み、友だちとはうまく関われない。
・友だちとの中に入ってしまえば遊べるが、何か嫌なことがあると出てしまう。



①事前の対応の工夫
・対象児がうれしそうな表情の時に「○○くん楽しそうだったね」と言ってあげる。
・自分の気持ちと言葉が結びついていないことがあるので「楽しいね」と言葉を教えていく。
・全体の中でも「楽しかったね」とその都度声をかけていく。

◎事例検討２　おたずね FAX より
―対象児５歳　非定型自閉症―
○複雑な作業になると理解ができない。他児と同じことをやらなければいけない、という意識があり、焦るようすが伺える。作業ができるようその都度、声をかけ対象児が不安にならないようにしたいと思っている。

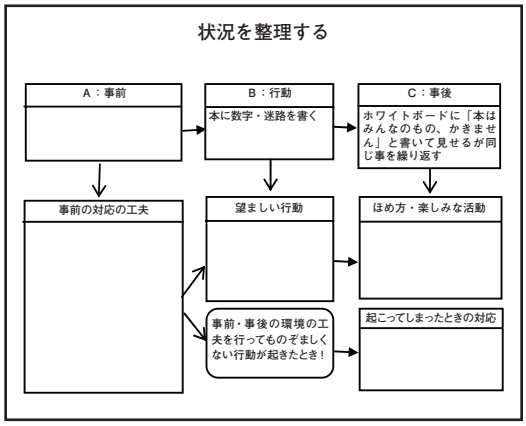


◎事例検討３　おたずねFAXより

―対象児６歳　自閉傾向―

○目を離すと本に自分の興味のある数字や迷路をかいてしまう。ホワイトボードに「本はみんなのもの､かきません」と書いて見せても、なかなか身につかない。どうしたらよいか。

→数字や迷路―視覚の情報には強い。漢字・アルファベットも好き。



○Ｃ：事後－なんで同じ事を繰り返すのか？を考える。

↓

本を見ていいが、書いていいのは紙・ホワイトボードと繰り返し教えていく。

保育者がついて学習をしなおす。又、家でも同じ対応にしてもらう。

●絵や工作に苦手さを持つ。

・手先の細かい動きのこと＝微細運動

発達障害の疑いがある子どもの中に多く見られる。

↓

なぜ、そのようになるのか？

・手順が記憶していられないので、何をしたらよいか途中でわからなくなってしまう。

・集中力が維持できず､途中であきてしまう。又、他の事に関心が移ってしまう。

―改善策の例―

①製作の手順を絵や写真を使い、ステップごとに手順を書いて、子どもがいつでも確認できるように貼る。

②部分的に保育者が手伝う。

③集中力が続かない時には、ところどころで休憩時間を入れる。

◎グループバズ

テーマ「対象児と他児がいるクラスづくりについて」

●Ａグループ

・できない子、叱られる子とならなようによいところを全体でほめ、紹介する。

・保育者が関わり方の見本を示すことで、少しずつ他児からも関わりが増えてくる。

・４月の時点で子ども達に対象児について話しておく。

●Ｂグループ

・クラスの中で他児と関わりながら生活できるように担任が関わる。

・対象児の近くにしっかりしてお手伝いしてくれる子を頼み、他児と関われる機会を増やす。

・周りの子が対象児の特性を理解してあげられる様な環境づくりをすることが大切である。

●Ｃグループ

・対象児に対して優しく見守ったり、認められるよう担任が声をかけていった。

・対象児のよいところやできたことを皆の前で発表したりほめていく。

●Ｄグループ

・保育者と対象児が関わっている姿を見ることで他児が「手伝いたい」と関わる様になり、一部からクラス全体に広がった。

・他児の思いも汲み取りつつ「こうしたら、いいんじゃない」等、アドバイスすることで関わりが増えた。

●Ｅグループ

・クラス全体に向け、対象児の特徴を話す。

・ホワイトボードに活動の順番を書く等、対象児に対しての取り組みが他児にもよい影響を与える。

・保育者の言葉がけ、態度、関わり方がまわりに影響を与える。

●Ｆグループ

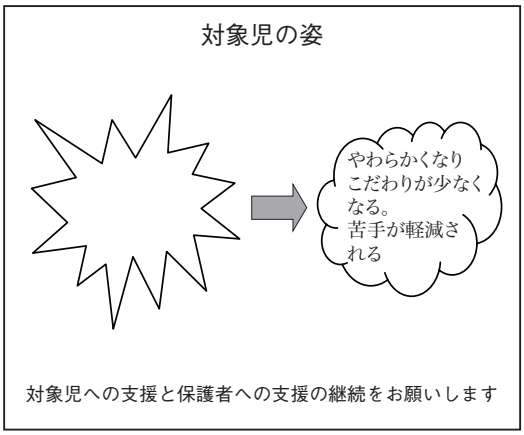
・担任だけではなく、他児にも対象児を理解してもらう。
・対象児の苦手なところを皆で補ってあげる。
・保育者だけでなく、子ども同士で助け合うことで優しさが生まれ、他児との関わりも増やしていくことができる。

◎塚越先生より講演

●保育者の役割

・子どもの発達特性について、保護者に発信していく（こういう対応をしていくと「こうなる」など具体的に）
↓
保護者に子どもの特徴を気づいてもらう。

・子どもの発達特性の理解と配慮をする統合保育の実践（統合保育のとびら参照）
・園で「できること」「できないこと」を保護者に伝える。
・専門機関との連携（保護者支援につなげる）



―参考文献―

・発達障害のある子の理解と支援
－ありのままの一人ひとりに向きあうために
母子保健事業団
・幼稚園・保育園での発達障害の考え方と対応
平岩幹男著　少年写真新聞社
・発達障害のいま　杉山登志郎著
講談社現代新書 2116